香美町「ふるさと教育20年」振り返り調査報告

受講者が大人になった現在の意識・地域との関係性分析（概要版）

1. 回答者属性と町外体験

86	29.7歳	83.7%
有効回答数 (N)	平均年齢(25-34中心)	町外生活経験率

■ 性別割合: 女性 **52.3%** / 男性 **44.2%** / 無回答 **3.5%**

【町外経験の内訳】

進学（町外） 55.8%

就職（町外） 18.6%

ずっと町内 16.3%

2. 現在の地域意識とギャップ（課題）

高い愛着に対し、日常の思い出しや繋がり感には乖離が見られる

地域への愛着 71.0%

今後の関わり意向 56.0%

地域との繋がり感 46.5%

日常の思い出し頻度 33.7%

【課題】 大人になってからの関係性を再構築し、高い「関わり意向」を具体的なアクション（関係人口・Uターン等）へ繋げる取り組みが必要。

3. 体験プログラムごとの特長

交流 / 自然・文化	体験者の成人後「関わり意向」が高い（**63〜66%**）。
歴史学習 / 産業学習	体験者の**7割超**が「現在の価値観決定に影響した」と回答。

4. クロス分析の重要ポイント

① 町外経験者ほど「関わり意向」が高い（価値の再発見）

一度町外に出て緊張や多忙を経験することで田舎の良さを再評価

就職（町外経験） 75.0%

進学（町外経験） 54.2%

ずっと町内 35.7%

②体験の質が現在の価値観・行動意向を決定

- 当時**「とても意味があった」**層の**93.3%**が現在も価値観に影響
- 現在の価値観に**「とても影響した」**層は**100%**が関わりを希望

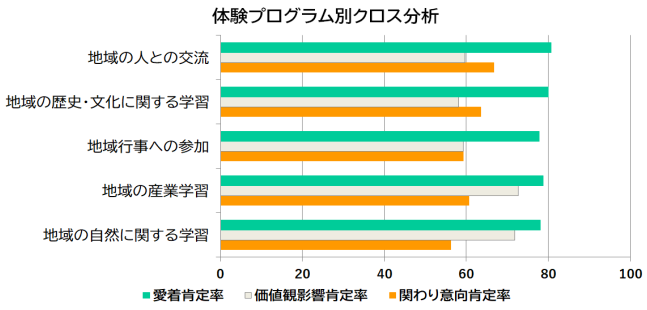
5. 自由記述に見る町民の思いと現場課題

■「ふるさと」の精神的意味と記憶のトリガー

- **精神的拠点:** 「安心感・リセットできる場所」「誰かが帰れるよう守る場所」。
- **想起トリガー:** 自然体験（田植え・山登り等）、都市での多忙・子育て・同窓会等。

▲現場への切実な課題提起

- **大人の姿勢:** 地域を「こんな田舎」と卑下せず肯定的に伝える姿勢が必要。
- **価値の言語化:** 当時無意識に受けていた体験を、大人になって意味づけ・言語化する機会の提示。



6. 愛着形成と「ふるさと教育」の因果構造モデル（20年間の心理プロセス）

【子ども時代】原体験

- 五感を使った自然体験
- 地域住民との触れ合い
- 香美町の食・行事体験

→

【青年期〜成人】対比

- 町外進学・就職（一度離れる）
- 都市生活での緊張・多忙
- **「田舎の良さ」を再評価**

→

【現在〜未来】意識・行動

- **「精神の柱」の確立**
- 関係人口 / Uターン意識
- 次世代支援への意向

【根底にある安心感・原体験の記憶】が大人になった現在の心の拠り所と関わり意向を支える

調査主体: 香美町（香美町教育委員会）

分析・考察協力: 兵庫県立大学環境人間学部 尾崎公子 教授